

令和7年度がん教育等外部講師連携支援事業 がん教育推進校実践報告

七尾市立石崎小学校

学級数：9学級 児童数：134人

【テーマ】

病気の予防 ～病気への理解と共生～

研究授業課題「もし身近な大切な人ががんになったら、自分にできることは何か？」

1 はじめに

現在、がんは国民の死亡原因の第1位であり、2人に1人が罹患し、3人に1人が死亡する時代である。しかし、本学級の児童に対する日頃の生活アンケートでは、夜更かしや朝食欠食の割合が高く、健康的な生活習慣への意識が低い傾向が見られた。

そこで、体育科保健領域の「病気の予防」の単元に「がん教育」を組み込み、生活習慣病などとの関連も踏まえながら、児童が「がん」についての正しい理解を深められるように計画した。その際、養護教諭と連携し、児童がテーマを「自分事」として捉え、真剣に学びに向かえるような具体的な手立てを工夫し、本単元が有意義な学習機会となるよう努めた。

2 実践

(1) 単元構成

単元のゴールを「病気（がん）への理解と共生について、考えたことを保護者に伝えよう」と設定し、相手意識と目的意識をもって主体的に学びに向かえるようにした。単元前半では、感染症や生活習慣病の知識やその予防策について学び、単元中盤では養護教諭と連携して、がんについての基礎知識を学ぶ構成とした。その後、外部講師を招いて、専門的な知見を生かした授業を行った。単元の後半では、学びを振り返り学んだことや伝えたいことを作文して保護者に伝える機会、保護者からコメントをもらいフィードバックする機会を設定した。

(2) がん経験者とのT・Tによる授業

外部講師として、石川県がん安心サポートハウス「つどい場はなうめ」の女性サポートスタッフを招き、授業を行った。

授業の課題を「もし身近な大切な人ががんになったら、自分にできることは何か？」と設定し、告知されたときの気持ちや治療方法、辛かったことや支えてもらつて嬉しかったことなどの話を聞いた。また、実際に闘病中に使用したウィッグなども見たり触ったりすることができた。授業の終盤では、学んだことをもとに、以下の2つの観点で振り返りを行った。

1. もし、身近な大切な人ががんになったらどのように接していくか。
2. 身近な大切な人に、がんについて今どのようなことを伝えたいか。

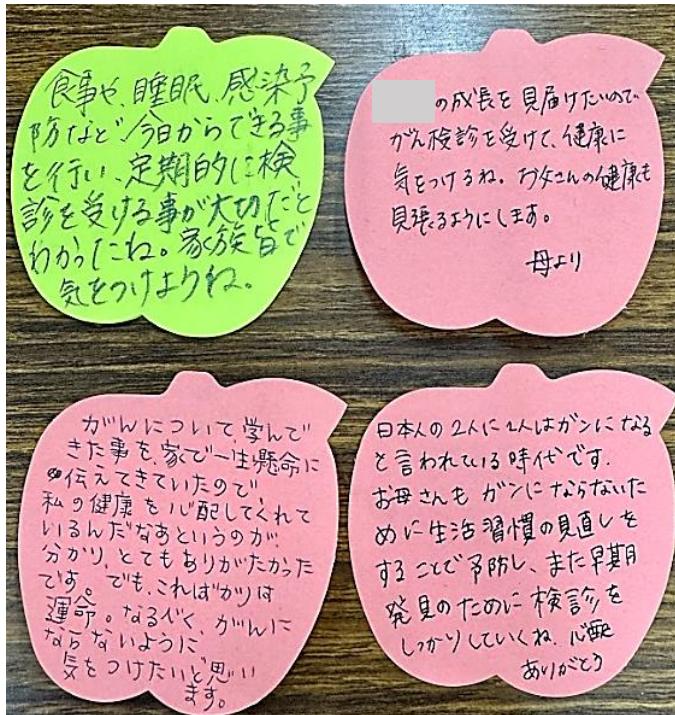


(3) 児童の感想

- ・身近な大切な人ががんになったら、優しく接してあげたり、できないことがあったら手伝ってあげたりしたいです。
- ・身近な大切な人ががんになったら、できるだけそばにいたり、遊ぼうって誘ってあげたりして孤独感を感じさせないようにしてあげたいと思いました。

- ・身近な大切な人に、早期のがんは95%で治ると言われているけど、治すのはとても大変だと伝えたいです。だから健康に良い生活習慣を続ける必要があることも教えないでください。

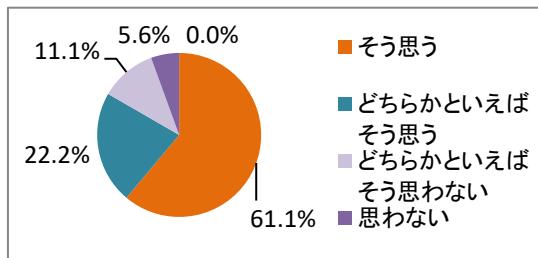
(4) 単元のゴール取組後の保護者のコメント



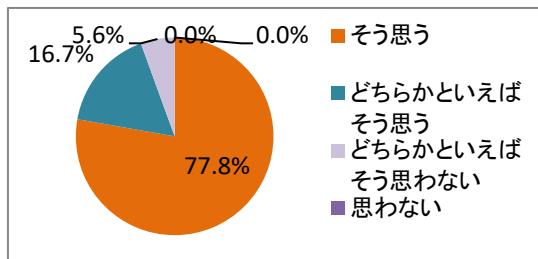
3 児童アンケートの結果

- ①がん検診を受けられる歳になったら、検診を受けようと思う。

【実施前（9月）】

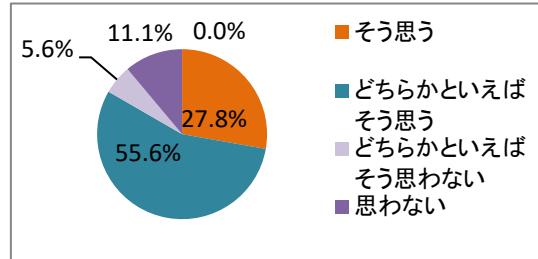


【実施後（11月）】

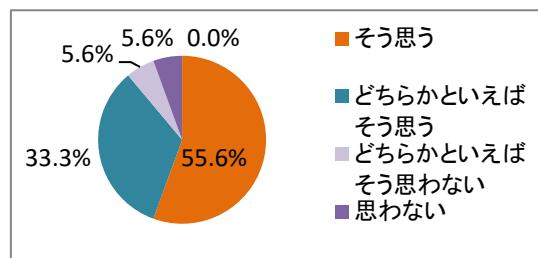


- ②がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う。

【実施前（9月）】



【実施後（11月）】



4 実践の成果と課題

○○成果○○

- ・アンケート結果①、②より、がんについて自分事として捉えて考えるようになり、ねらいとする自他の健康と命の大切さについての意識が高まったと考える。方策として、学んだことを保護者に作文で伝えるという単元ゴールの設定や、がんに対しての正しい知識を定着させるために養護教諭と連携して臨んだことが効果的だったと感じる。
- ・外部講師の話は深く心に残るものであり、病気の怖さや、病気を患った方に対してどのように接すればよいかを一人一人が考える、とても有意義な機会になった。

◆◆課題◆◆

- ・授業では、「身近な大切な人」を具体的に挙げさせた上で外部講師の話を聞くことで、より自分事として深く考えることができたと考える。
- ・外部講師の活用は、自他の健康や命の大切さを学ぶ上で大きな効果が得られると感じた。そのためにも、外部講師と時間的なゆとりをもった、綿密な打ち合わせが必要だと感じた。